

東洋文庫

125

平凡社

義経記
2

佐藤謙三
小林弘邦 訳

さとうけんぞう

佐藤謙三 明治43年横浜生。国学院大学文学部国文学科卒(昭8)。国学院大学教授、文学部長。専攻 平安文学。主著『平安時代文学の研究』(角川書店)、『古代宮廷生活と女性』(岩波講座『日本文学史』第1巻所収)など。現住所 横浜市保土ヶ谷区西久保町110

こばやしひろくに

小林弘邦 昭和5年東京生。国学院大学大学院修士修了(昭31)。国学院大学図書館司書。専攻 中世戦記文学。現住所 東京都荒川区西尾久7-47-3

義経記 2 [全2巻]

東洋文庫 125

昭和43年10月10日 初版発行
昭和46年7月1日 再版発行

検 印

訳 者

佐藤謙三
小林弘邦

東京都千代田区四番町4番地

省 略

発行者

下中邦彦

発行所

郵便番号102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京29639 株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします
© 株式会社 平凡社 1968

印刷 株式会社共立社印刷所
製本 株式会社石津製本所

0193-801252-7600

凡 例

一 本書の本文は流布本の一つ、その巻末に寛永十癸酉五月吉日西村又左衛門尉梓行とある平仮名整版本を用い、さし絵は、元祿十年丁丑孟春穀日京寺町松原下ル町梅村三郎兵衛と巻末にある絵入りの平仮名整版本によった。

一 本書は、原文をできるだけ忠実に口訳することに心がけた。しかし、現代文としてその文意が通じないような場合などには、語句の順序を変えたり、主語や客語等を補ったりした個所や、意識したところもある。また、原本にはないが、異本にある本文を挿入した方が理解しやすいと思われる場合に限り、口訳した始めと終りの右側に印を付けて挿入した。* 印は田中本、△ 印は芳野本、● 印は判官物語、□ 印は義経物語である。

なお現段階で解釈できない語句は原文のままとした。

一 和歌は原文のままとした。

一 義経に関する伝説を中心に、『義経記』を読む上で知っていた方がよいと思われる人物の略歴、系図、伝説、また官位や、諸記録との相違などを巻末に注として付けて読者の参考に供した。

一 原本の明らかに間違いと思われる人名・地名は、原文のままとし、() 内または注で正した。間違いと思われる語句についても同様である。

一 本書の口訳にあたって、岡見正雄校注『義経記』（日本古典文学大系）の恩恵を被った。また、高木卓訳『義経記曾我物語』（古典日本文学全集）を参考にした。

一 本書の目録は、漢字、仮名遣い、振り仮名等、すべて原文どおりとして、原本の形態を生かした。このため、目録の題と本文の題とが一致しないことがある。

なお、本書に取り上げた『義経記』の異本と、しばしば引用して参考にした本とを挙げて、簡単に解説を加えておく。

田中本義経記

高橋貞一編著の『田中本義経記と研究』の解説によると、この田中忠三郎氏蔵の義経記は、江戸初期の書写本で、諸本の脱誤をかなり多く補うことのできる貴重な伝本である。なお本口訳本に引用した義経物語（高木武氏旧蔵）は、高橋氏の解説によると田中本より後出と認められる同類本である。田中本は昭和四十年十一月、未刊国文資料刊行会から刊行されている。

橋本判官物語

稲垣本・稲武本といった、現橋健二氏の蔵本。巻七の題簽には「義経記」とあるが、内題はすべて「判官物語」と書いてあり、室町末期の書写本と言われている。昭和四十一年十月に古典研究会から複製本が刊行された。

芳野本義経記

山岸徳平博士は、永祿六年以前のもので、流布本中のある系列に属する一小異本と称すべきであると言われている。昭和四十年四月に静嘉堂文庫蔵のものが複製本として古典研究会から刊行された。

異本義経記

乾坤二冊で、叡山文庫に所蔵されている。いわゆる義経記系の諸本とは異なり、覚書き・個条書き風である。伝承文学研究第四、五号に志田元氏の翻刻したものがある。

平家物語

異本の数が非常に多い。一方流（例えば、岩波文庫や角川文庫の本）と八坂流（国民文庫本）の語り本に分かれており、また、長門本（二十巻）とか延慶本（六卷十二冊）などの読み本もある。なお、本書によく引用した屋代本平家物語は、八坂流の語り本中最も古態を持つ一本で、現存の本は巻第四・第九を除く巻第十二までと、剣巻及び抽書とから成っている。本書の複製本が春田宣氏の解説付きで刊行されている。

源平盛衰記

平家物語の異本の一つで、全四十八巻からなる。通俗日本全史（大正元年、早稲田大学出版部刊）

所収のものが活版本のうちではよいとされている。

吾妻鏡

東鑑とも書く。治承四（一一八〇）年四月九日から文永三（一二六六）年七月二十日までの鎌倉幕府の記録。ただ純粹の日記ではないので、史料価値は下がる。国史大系・国書刊行会叢書・日本古典全集並びに岩波文庫所収。

玉葉

玉海ともいう。長寛二（一一六四）年閏十月十七日から正治二（一二〇〇）年十二月二十九日まで
の九条兼実の日記。国書刊行会叢書所収（昭和四十一年にこの複製本がすみや書房から出版されている）のものと、哲学書院刊（明治四十一年）のものがある。

吉記

吉御記・吉戸記・吉大記ともいう。仁安元年から二十八年間の吉田経房の日記。現存のものは仁安元（一一六六）年から二年、承安二（一一七二）年から安元三（一一七七）年、治承三（一一七九）年から文治元（一一八五）年と文治四年、建久二（一一九一）年である。史料大成所収。

百練抄

全十七卷。現存のものは、卷四の冷泉天皇の安和二（九六九）年から後深草天皇讓位の正元元（一二五九）年までの、編年体の記録で、京都側、公家方の事情に詳しい。作者未詳。国史大系所収。

左記

真言行法の故実書。口訳本に引用した一文は序文に当たる。群書類従所収。

愚管抄

全七卷。著者慈円の史論と言われる。国史大系、日本古典文学大系、岩波文庫所収。

保暦間記

全五卷。保元の乱から後醍醐天皇崩御の年までの、一八二年間における争乱を書いた、著者、成立年代不詳。群書類従所収。

尊卑分脈

十四卷。正しくは「編纂本朝尊卑分明図」という。洞院家で代々書き継がれた、皇室及び源平藤橘の諸系図。国史大系、故実叢書所収。

目 次

凡 例	· · · · ·	一
卷第五	· · · · ·	三
卷第六	· · · · ·	八
卷第七	· · · · ·	一五
卷第八	· · · · ·	二六

義
經
記
2

小 佐
林 藤
弘 謙
邦 三
訳

義経記 卷第五目録

判官はうくわんよし野山に入給ふ事

しづかよし野山にすてらるゝ事

義経よしつねよし野山を落給おちふ事

たゞのふよし野にとゞまる事

たゞのふよし野山の合戦かせんの事

よし野法師判官はうしを追をうかけ奉る事

義経記 卷第五

判官よし野山に入給ふ事

都には春が来たのに、吉野山はまだ冬であった。まして師走のことなので、谷の小川も氷にとざされていて、それに、なかなかの険しい山であったが、義経は、尽きせぬ名残りを捨てかねて、静をここまで連れて来ていた。いろいろの難所を通して、一二の迫はさま、三四の峠、杉の壇だんという所まで奥深く分け入った。

弁慶は、

「この殿のお供をして、何不足なくお世話することは面倒だ。四国へお供した時にも、同じ船に十余人もの女性を乗せて心配だったのに、今またこの深山まで連れてくるとは理解で

きない。こんなふうにお供して歩いていて、麓の里へでも知れたならば、卑しい奴らの手にかかり、射殺されて名を広めたりすることになるのが残念だ。どうする、片岡。さあ、一応われわれは落ちのびて助かるうではないか」

と言ったところ、

「それもそうだが、しかしどうかな。ただ知らぬふりをして放っておこう」と言った。

義経はそれを聞いて、心苦しう思った。静との別れを惜しめば、彼等と仲たがいになる。また彼等と仲たがいすまいとすれば、静との名残りが捨てきれず、いろいろと気をつかつて涙に咽んだ。

義経は、弁慶を呼び寄せて言った。

「一同の心中を義経は知らないわけではないけれども、僅かの縁が捨てられずに、ここまで女を連れて来たことは、実際自分ながら自分の心が理解できないのだ。ここから静を都へ帰そうと思うが、どうだろう」

弁慶は畏まって、

「それは大変結構なお考えです。弁慶も、そのように申し上げたいと思っていたのですけれども、ご遠慮しておりました。そのようにお考えになられたのなら、日の暮れないうちに

少しも早くお急ぎください」

と言ったので、義経は、いったん帰すと言っておきながらそれを翻したなら、いったい家来たちがどう思うだろうかと考えると、今は仕方なく、

「静を京へ帰したい」

と言ったところが、侍ふたりと雑役の下男三人が静のお供をしたいと申し出たので、

「全くこの義経に命をくれたものと思うぞ。道中十分に労って京都へ戻り、お前たちはそれから後、どこへでも自分の思うままに行くがいい」と言っておいてから、静を側へ呼んで、

「愛情がなくなつて都へ帰すのではない。ここまで引き連れて来たのも、愛する心がいいかげんなものではなかったからだ。辛い旅に人目も考えずに連れて来たが、よく聞けば、この山は役えんの行者ぎやうじやうじんが、最初に踏み開いた菩提ぼだいの峰きんねん（金峰山の異称）なので、精進潔斎をしなくてはどうしても入山できないのだ。それを、自分の煩惱に引かれてここまで連れて来たが、神の御心を恐れねばならない。ここから帰つて磯の禪師の許に隠れて、来年の春を待つてもらいたい。義経も来年の春、本当にどうにもならなかったら、出家するつもりだ。それだから、お前もその志があるならば、いっしょに出家して、経を続み、念仏を唱えよう。この世でもあの世でも、どうしていっしょにいられないことがあるう」

と言ったところが、静は聞き終わらないうちに、着物の袖を顔にあてて、泣くよりほかはなかった。

「ご寵愛の衰えなかった間は、四国への波の上までもお連れくださいました。ふたりの縁が終わったのであればいたし方ありません。ただ女のつらく悲しい身の上が思い知られて悲しいのでございます。お話し申し上げますのもどうかとは思いますが、去る夏の頃から、ただならぬ身になったと申し上げましたのは、実は出産することが、もう確定したことなのです。判官様と私のことは、世間周知のことですので、六波羅の役所へも、鎌倉へも知れるでしょう。東国の人は人情がないものと聞いていますから、すぐ鎌倉へ護送され、どのような辛い目を見ることがわかりません。ただもう、思い切ってこの場でどのようなにしてもください。判官様のためにも、また私自身のためにも、なまじ生きながらえて、いろいろと思ひ悩むよりは」

とくどくど言うので、

「とにかく都へ戻りなさい」

と言った。けれども、静は義経の膝の上に顔をのせて、大声に泣き伏した。侍たちもそれを見て、皆貰い泣きをした。

義経は、鬢の乱れを直すのに使う小さな手鏡を取り出して、

「これは、朝夕顔を映してきたものだ。見る度に、義経を見ると思つて見なさい」と言つて、渡した。

静はそれを受け取つて、今はなき人の形見のように胸に抱いて恋い慕つた。そして、涙の間に、こう詠んだ。

見るとても嬉しくもなし増鏡ますかがみ恋しき人の影を止めねば

そこで、義経は枕を取り出し、これを身から放さずにいてくれと言いながら、こう詠んだ。

急げども行きもやられず草枕静に馴れしころならひに

その他、財宝をたくさん取り出して与えた。中でも、格別大事にしていた紫檀の胴に羊の皮を張つた、啄木組みの美しい調べの緒のついた鼓を与えて言つた。

「この鼓は、義経が秘蔵のものだ。白河院の時に、法住寺の長老が唐に渡つて、二つの宝物を持ち帰つた。それは、めいきよくという琵琶と初音はつおという鼓だった。めいきよくは宮中にあつたが、保元の乱に崇徳上皇のもとで焼けてしまった。初音は、讃岐守正盛が頂戴して